

虚空ニ向テ投タマフ、或ハ河水ヲ立ナガラ、御足ニテ蹴カケ玉フテ、平手是ヲ吞ヨトノ玉ヒ、雙眼ニ御涙ヲ浮ベ玉フ事多シ、皆人はヲ見テ、カ、ル異相ノ人ナガラモ、御眞實ノ御手向、寔ニ奇特ノ御芳志ナレバ、平手が亡魂イカ計カ、忝ク存ベキトテ、各信感シ奉ル、

〔常山紀談 二十〕正則島

福

常に物あらく人を誅する事を好めると、世の人もいひあへり、或時近習

の士、少の咎ありて、城内島の櫓に押こめ、食物をあたへず、餓死せしめんといはれしに、其士の恩を受たりし茶道坊主、罪なくてかゝる有様をいたみ、潜に夜焼飯を携へ行たり、彼士われは罪ある故に斯成たり、汝只今のふるまひを殿聞し召れなば、われよりも罪重からん、又飯を喰たりとて命助かるべきにあらざれば、とく歸れといひしに、茶道云けるは、同じ罪に行はるゝとも後悔なし、われ先に既に殺さるべき事の有りしに、君の救ひにて一度たすかり候ひぬ、恩をうけて報せざるは人にあらず、こなたも又よわけなる心おはして、吾志を空しくし給ふ事こそ口惜けれといへば、彼士悦んで、さらばとて是を食す、夜ごとにかくの如くしたりけり、程經て死したるならんとて、正則矢倉に行れしに、顔色少しも衰へず、正則さては飯を送りたる者あらんと怒られしに、茶道來り、某こそ送りたれと申す、正則はたとにらみて、おのれ何故にかくゑたるや、頭二ツに切りなんと、膝立直されし時、茶道少しもさわがず、我昔罪を得て既に水せめにあひて殺さるべかりしに、彼人の申ひらきたりし故、今日まで思ひかけず命存らへ候ひき、其恩を報せん爲、毎夜亥のびて飯をはこび候といふ、正則怒れる眼に涙を流し、汝が志感するにあまれり、かくこそ有べけれ、彼士をもゆるすべしとて、其まゝ、矢倉の戸をひらきて罪を宥め、茶道をも深く賞せられけり、されば暴惡の人と世に稱しけれど、かゝる義に感ずる事の切なる故に、士のおもひ慕ひて力を竭し、正則の爲に身をすて、奉公しけるも、げに故ある事にこそ、

〔交會雜記 二上〕

一徂徠ハ芝ニ舌耕シテ居レタル時、至極貧ニテ、豆極屋ニカリ宅シテヲラレタ